

## 第二言語としての「テイル」の習得における プロトタイプの形成

孫 猛

小 泉 政 利

玉 岡 賀 津 雄

宮 岡 弥 生

キーワード:「テイル」、プロトタイプ、母語の転移、一対一原理

### 要 旨

本研究は日本語を第二言語として学習している中国語母語話者を対象に、テンス・アスペクト形態素「テイル」について考察したものである。結論として、中国語母語話者による「テイル」の習得過程もアスペクト仮説と一致し、「テイル」は活動動詞から到達動詞へと付加されていき、「テイル」が表す「動作の持続」という意味は「結果の状態」という意味よりは習得されやすい。さらに、中国語母語話者にとって「テイル」のプロトタイプは一対一原理により形成されるものというよりは、むしろ母語の転移によって形成されるものであるということも明らかにした。

### 1. はじめに

テンス・アスペクト形態素は時間の概念を表すもので、重要な文法範疇である。これまで第二言語としての日本語のテンス・アスペクト形態素の習得研究は基本的にアスペクト仮説の検証を中心に行われてきた。アスペクト仮説とは動詞に内在化されたアスペクト的な素性がテンス・アスペクト形態素の習得に影響することを論じるものである。たとえば、進行形の「テイル」の習得過程としては活動動詞に始まり、その後達成動詞・到達動詞に広がっていく(Shirai 1995; Shirai & Kurono 1998; Sugaya & Shirai 2007)。さらに、「テイル」が表す「動作の持続」と「結果の状態」という2つの基本的な意味も注目され、どちらが習得されやすいかをめぐって議論されている。習得難易度としては「動作の持続」の習得は「結果の状態」と比べて比較的易しいことが多くの先行研究によって示されている(黒野 1995; Shirai & Kurono 1998;

許 1997, 2005; 小山2003; 菅谷 2003; Sugaya & Shirai 2007)。理論的に、「テイル」が活動動詞に付加されると「動作の持続」を、到達動詞に付加されると「結果の状態」という意味を表すことから、「動作の持続」と「結果の状態」という2つの意味の習得難易度を調べることもアスペクト仮説を検証するアプローチの一つであると考えられている。しかし、「テイル」の習得はなぜ普遍的に活動動詞→達成動詞・到達動詞というパターンで進んでいくのか、そのメカニズムは自明とはいえない。そこで、本稿は日本語を第二言語として学習している中国語母語話者を対象に、アスペクト仮説およびプロトタイプ仮説を検証するうえで、「テイル」のプロトタイプの形成について考察する。

## 2. アスペクト仮説とプロトタイプ仮説

文のアスペクト的な概念を表すカテゴリーは主に文法的アスペクト (grammatical aspect) と語彙的アスペクト (lexical aspect) に分かれている。進行形、完了形など、助動詞や屈折形態素によってアスペクト的な概念を表す文法的アスペクトに対し、動詞に内在化されたアスペクトの意味素性は語彙的アスペクトと呼ばれてきている。語彙的アスペクトの観点から Vendler (1967) は動詞を状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞の4種類に分類している。英語では状態動詞(たとえば、know, loveなど)は継続的な状態を表す動詞であるのに対し、活動動詞(たとえば、run, swimなど)は継続的な動作を表す動詞である。一方、達成動詞(たとえば、run a mile, swim an hour など)は到達点のある継続的な動作を表す動詞であるが、到達動詞(たとえば、die, stopなど)は瞬間的に起こる動作を表す動詞である。あらゆる言語にこの4種類の動詞が存在するが、言語によって同じ種類に分類される動詞が異なる場合もあると考えられている。たとえば、英語の「know」は進行形「ing」と結び付くことができなく、状態動詞に分類されているが、日本語の「知る」は「テイル」と結び付いて「結果の状態」の意味を表すことができることから、到達動詞に分類されている (Li & Shirai 2000, p.17)。Vendlerの動詞4分類を踏まえて、Andersen (1991, p.311) はさらに、「動作性」「瞬間性」「限界性」の3つの意味素性の有無を用いて動詞の語彙的アスペクトをより詳細に定義した(表1)。

表1 動詞の内在的な意味素性(Andersen 1991, pp311)

意味素性	状態動詞	活動動詞	達成動詞	到達動詞
動作性	-	+	+	+
瞬間性	-	-	-	+
限界性	-	-	+	+

このような語彙的アスペクトがテンス・アスペクト形態素の習得にどのように影響するかに関して、「アスペクト仮説 (Aspect Hypothesis)」と呼ばれる次のような仮説が提案されている。

- 1) Learners use (perfective) past marking on achievement or accomplishment verbs, eventually extending use to activity and state verbs.
- 2) In languages that encode the perfective-imperfective distinction morphologically, imperfective past appears later than perfective past, and imperfect past marking begins with stative and activity (i.e., atelic) verbs, and then extends to accomplishment and achievement (i.e., telic) verbs.
- 3) In languages that have progressive aspect, progressive marking begins with activity verbs, and then extends to accomplishment/achievement verbs.
- 4) Progressive marking is rarely incorrectly overextended to stative verbs (in L1 acquisition)

(Andersen & Shirai 1996, p.553; Li & Shirai 2000, p.50)

この仮説は母語の獲得および第二言語の習得において、様々な言語を用いて検証され、普遍的なものと主張されている。第二言語における進行形の習得に関わるのは3)である。つまり、進行形の習得過程としては、普遍的に活動動詞に始まり、その後到達動詞・達成動詞に(活動動詞→達成動詞・到達動詞)広がっていくということである。日本語の進行形「テイル」の習得に関しては、Shirai (1995) および Shirai & Kurono (1998) が、日本語を学習する中国語母語話者を対象にインタビューを用いた研究を行ったところ、学習者の発話の中で達成動詞と到達動詞に比べて、「テイル」は活動動詞に付与される頻度が比較的高いことが分かった。また、小山(2003)と許(1997, 2005)が絵の描写タスクおよび文法性判断タスクを用いて「テイル」の「動作

の「持続」と「結果の状態」の意味の習得順序について調べたところ、「動作の持続」との習得は「結果の状態」より易しく、「テイル」は活動動詞に付与されやすいという結果が得られた。中国語母語話者による「テイル」の習得は活動動詞→達成動詞・到達動詞というパターンで進み、普遍的なアスペクト仮説に従うことがShirai (1995)やShirai & Kurono (1998)、小山(2003)、許(2005)の研究によって示されているといえよう。さらに、この仮説は中国語母語話者だけではなく、第二言語として日本語を学習している英語、韓国語、ロシア語、ドイツ語などの母語話者についても検証されている(黒野1995; Shirai & Kurono 1998; 小山 2003; 菅谷 2003; Sugaya & Shirai 2007)。

進行形が普遍的に活動動詞から到達動詞・達成動詞へと付与されていくパターンを解釈するために、「プロトタイプ仮説(The Prototype Hypothesis)」が提唱されている。プロトタイプ仮説とは、あるカテゴリーの典型的なメンバー、すなわちプロトタイプから、非典型的・周辺的なメンバーへと習得が進んでいくという、プロトタイプ理論を母語および第二言語の習得に応用したものである。

Development starts with the prototype of the category, then extends to items similar to the prototype, and finally to least prototypical members

(Shirai & Andersen, 1996, p.533; Li & Shirai, 2000).

進行形は典型的に「+動作性」「-限界性」「-瞬間性」という3つの意味素性によって規定される活動動詞とより強く結び付けられ、「動作の持続」というプロトタイプの意味が先に習得される。その後、達成動詞が到達動詞と結びつけられて、他の意味が習得されていくと考えられている(Andersen & Shirai 1996)。

### 3. 第二言語習得における「テイル」のプロトタイプの形成

#### 3-1. 母語による「テイル」のプロトタイプの形成

中国語には、日本語の「テイル」に対応する進行形「在(zai-)」が存在する。「テイル」は活動動詞に付加されて「動作の持続」を、到達動詞に付加されて「結果の状態」を表す。一方、中国語では「在(zai-)」は活動動詞に付加されて「動作の持続」という意味を表すが、到達動詞には付加されない。「結果の状態」という意味を表す場合には完了形の「了(-le)」が使われる。前述したように、中国語母語話者による「テイル」の習得においては、「動作の持続」という意味は「結果の状態」という意味より習得しやすいこ

とが多くの先行研究によって明らかとなっている(Shirai & Kurono 1998, 許1997, 2005; 小山 2003)。これは「動作の持続」という意味は、学習者が母語の進行形「在(zai-)」を直接に「テイル」にマッピングするという正の転移により習得されやすく、中国語母語話者にとって「テイル」の「動作の持続」というプロトタイプ的な意味は母語の進行形「在(zai-)」からくる可能性がある」と指摘されている(Shirai & Kurono, 1998)。一方、「結果の状態」という意味は、中国語では進行形「在(zai-)」ではなく、完了形「了(-le)」が対応する。学習者が過去形「タ」を用いて表現することから、母語の負の転移により、習得されにくいとされている(許1997, 2005)。小山(2003)によると、韓国語母語話者も過去形「タ」を用いて「結果の状態」という意味を表現する傾向は見られたが、中国語母語話者に比べると「タ」に引きずられる傾向は弱かった。これは、韓国語では、進行形「-eiss」が到達動詞に付加されて「結果の状態」という意味を表すことが可能であるが、中国語では進行形の「在(zai-)」は到達動詞とは結びつけられないことが原因であると考えられる。

### 3-2. 一対一原理による「テイル」のプロトタイプの形成

一対一原理というのは、人間の認知システムに関わるもので、母語および第二言語の習得において、学習者が一般的に一つの形に一つの意味をマッピングすることを好んでいるという原理である(Andersen 1984)。日本語の進行形「テイル」は「動作の持続」「結果の状態」「パーフェクト」「習慣」などの意味をもっている。さらに、「テイル」が「動作の持続」と「結果の状態」のどちらとも日本語学習者によって高い頻度で使用されている(Shirai & Nishi 2005)。したがって、一対一原理により、学習者はインプットに出現した「動作の持続」と「結果の状態」のどちらかを先に「テイル」という形にマッピングさせなければならない。「動作の持続」を表す場合は「テイル」が義務的に使われるので、意味と形が一対一の関係が成り立ち、比較的習得されやすい。一方、「結果の状態」を表す場合は、理論的に「テイル」「タ」の両方とも可能であるので、学習者が「結果の状態」という意味を「テイル」にマッピングすることが比較的困難であると考えられている(Shirai & Kurono 1998; Sugaya & Shirai 2007)。

## 4. 本研究の目的

- (1) アスペクト仮説を検証する。
- (2) プロトタイプ仮説を検証し、形態素「テイル」のプロトタイプの形成における

母語の転移説と一対一原理の妥当性について検討する。

## 5. 調査の方法

### 5-1. 調査の対象

中国の大学で日本語を第二言語として学習している学習者251名(大学1年生90名、2年生79名、3年生82名)と統制群としての日本語母語話者76名を対象に、テンス・アスペクト形態素「タ」と「テイル」に関する意味判断課題を実施した。学習者は全員、大学入学前の日本語学習経験を持たない。学習者251名のうち調査票に性別または生年月日を記入しなかった3名を除く248名の学年・性別毎の平均年齢は次のとおりである。1年生男性20歳4ヶ月、1年生女性19歳9ヶ月、2年生男性20歳10ヶ月、2年生女性20歳9ヶ月、3年生男性21歳8ヶ月、3年生女性21歳9ヶ月。年齢は12進法なので月齢を使って、3(1年、2年、3年)×2(男性、女性)の分散分析を行った結果、学年についての主効果[F(2, 224)=31.599,  $p<.001$ ]は有意であったが、性別の主効果[F(1, 242)=1.214,  $p=.272$ , n.s.]は有意ではなく、また学年と性別の交互作用[F(2, 242)=1.460,  $p=.234$ , n.s.]も有意ではなかった。すなわち、性別は学習者の年齢に影響しないことを意味する。調査時期はちょうど年度の終わりにあたるので、学年をそのまま学習期間として、1年から3年とした。

### 5-2. テストの作成

テストは日本語のテンス・アスペクト形態素「テイル」の意味習得を考察するもので、16個の課題文で構成されている。課題文は「タ」文と「テイル」文のどちらが提示された文脈と意味的に一致するかを判断してもらうという形式にした。16個の課題文の文脈は動作終了後の状態を表す場面と、進行中の動作を表す場面の2種類に分けられていた。形態素「テイル」が到達動詞と結びついて「結果の状態」、活動動詞と結びついて「動作の持続」を表わすため、動作終了後の状態を表す場面に対応する選択肢には到達動詞、進行中の動作を表す場面に対応する選択肢には活動動詞を使用した(1)(2)。

#### (1) 結果の状態を表す場面・到達動詞

文脈: 東京ゆきの飛行機は午後3時に仙台空港を出発する予定だった。天気が悪くなったため、出発時刻が1時間延期された。いま、午後5時だ。

- a. 飛行機は仙台空港を出発した。
- b. 飛行機は仙台空港を出発している。

## (2) 動作の持続を表す場面・活動動詞

文脈:7月、田中さんは300ページの英語の本を翻訳し始めた。2か月後、あと100ページ残っている。いま、9月だ。

- a. 田中さんは英語の本を翻訳した。
- b. 田中さんは英語の本を翻訳している。

## 6. 分析結果

動作終了後の状態を表す8場面、進行中の動作を表す8場面の文脈にそれぞれ到達動詞に付与される「テイル」と、活動動詞に付与される「テイル」が対応する。そして、場面ごとに学習者の各グループおよび日本語母語話者が「テイル」を使用する割合(各グループの「テイル」の選択者数割る各グループの人数合計)を算出すると、表2のようになった。

表2 中国語を母語とする日本語学習者および日本語母語話者の「テイル」の使用頻度(場面ごとに)

文脈の意味	動詞の種類	場面	動詞	中国語を母語とする日本語学習者				日本語母語話者(n=76)			
				1年生(n=90)	2年生(n=79)	3年生(n=82)	1年生(n=90)	2年生(n=79)	3年生(n=82)	日本語母語話者(n=76)	
結果の状態	到達動詞	1	出発する	4	4.44%	8	10.1%	8	9.76%	29	38.16%
		2	到着する	3	3.33%	7	8.8%	7	7.54%	54	71.05%
		3	中止する	9	0.00%	13	16.4%	15	18.29%	23	36.84%
		4	入学する	11	2.22%	18	10.1%	7	8.54%	62	81.58%
		5	開始する	11	2.22%	16	20.2%	12	14.63%	57	75.00%
		6	卒業する	6	6.67%	6	7.5%	6	7.32%	42	55.26%
		7	結婚する	9	0.00%	16	20.2%	18	21.95%	34	44.74%
		8	終了する	6	6.67%	6	7.5%	5	6.10%	25	32.89%
動作の持続	活動動詞	1	建設する	86	95.56%	70	88.61%	77	93.90%	76	100.00%
		2	訪問する	83	92.22%	66	83.54%	75	91.46%	73	96.05%
		3	練習する	88	97.78%	72	91.14%	80	97.56%	75	98.68%
		4	翻訳する	86	95.56%	66	83.54%	78	95.12%	74	97.37%
		5	選択する	83	92.22%	68	86.08%	74	90.24%	73	96.05%
		6	修理する	86	95.56%	66	83.54%	77	93.90%	75	98.68%
		7	整理する	62	68.89%	60	75.95%	60	73.17%	48	63.16%
		8	掃除する	75	83.33%	64	81.01%	71	86.59%	73	96.05%

「テイル」が到達動詞に付加される8場面において、学習者の使用頻度をもっとも高いのは1年生が「入学する」「開始する」の12.22%、2年生が「開始する」「終了する」の20.25%、3年生が「結婚する」の21.95%であったが、日本語母語話者は「入学する」の81.58%であった。一方、学習者の使用頻度をもっとも低いのは1年生が「到着する」の3.33%、2年生が「卒業する」「終了する」の7.59%、3年生が「終了する」の6.10%であったが、日本語母語話者は「中止する」の36.84%であった。学習者と日本語母語話者を比較してみると、学習者による「テイル」の使用頻度は20%以下であった一方、日本語母語話者は30%から80%の間であった。つぎに、活動動詞に付加される8場面の「テイル」の使用頻度を見てみよう。学習者の使用頻度をもっとも高いのは1年生が「練習する」の97.78%、2年生も3年生も「練習する」の91.14%、97.56%であったが、日本語母語話者は「建設する」の100%であった。一方、学習者の使用頻度をもっとも低いのは1年生が「整理する」の68.89%、2年生も3年生も「整理する」の75.95%、73.17%であったが、日本語母語話者は「整理する」の63.16%であった。

つぎに、到達動詞に付加される場合および活動動詞に付加される場合における学習者と日本語母語話者による「テイル」の使用頻度を比較するため、それぞれの8場面の平均(8場面の合計選択者数割る8場面の合計人数)を算出した(表3)。

表3 中国語を母語とする日本語学習者および日本語母語話者の「テイル」の使用頻度(意味別に)

		中国語を母語とする日本語学習者								日本語母語話者(n=76)	
		1年生(n=90)		2年生(n=79)		3年生(n=82)					
文脈の意味	動詞の種類	選択者数	「テイル」の割合	選択者数	「テイル」の割合	選択者数	「テイル」の割合	選択者数	「テイル」の割合	選択者数	「テイル」の割合
結果の状態	到達動詞	59	8.19%	80	12.66%	78	11.89%	331	54.44%		
動作の持続	活動動詞	649	90.04%	532	84.18%	592	90.24%	567	93.26%		

注：合計選択者は、8場面の合計である。そのため、1年生の合計は720(8場面×90名)、2年生は632(8場面×79名)、3年生は656(8場面×82名)。

日本語母語話者は608(8場面×76名)である。

到達動詞に付加される「テイル」の平均使用頻度は学習者の1年生が8.19%、2年生が12.66%、3年生が11.89%であったのに対し、日本語母語話者が54.44%であった。そこで、グループごとに「テイル」の平均使用頻度に対し、一様性検定を行った結果、学習者の1年生[ $\chi^2(1)=503.339$ ,  $p<.001$ ]、2年生[ $\chi^2(1)=352.506$ ,  $p<.001$ ]、3年生[ $\chi^2(1)=381.098$ ,  $p<.001$ ]のいずれのグループも有意であり、「テイル」の使用頻度がチャンスレベルの50%より低かったが、日本語母語話者[ $\chi^2(1)=4.796$ ,  $p<.05$ ]は



有意水準5%で有意であり、「テイル」の使用頻度がチャンスレベルの50%よりやや高かった。つまり、文脈が「結果の状態」を表すいずれの場面においても、学習者の各グループは「テイル」よりは「タ」を選択する傾向があるが、日本語母語話者は「テイル」と「タ」を同程度で選択する。一方、活動動詞に付加される「テイル」の平均使用頻度は学習者は1年生が90.14%、2年生が84.18%、3年生が90.24%であり、日本語母語話者は

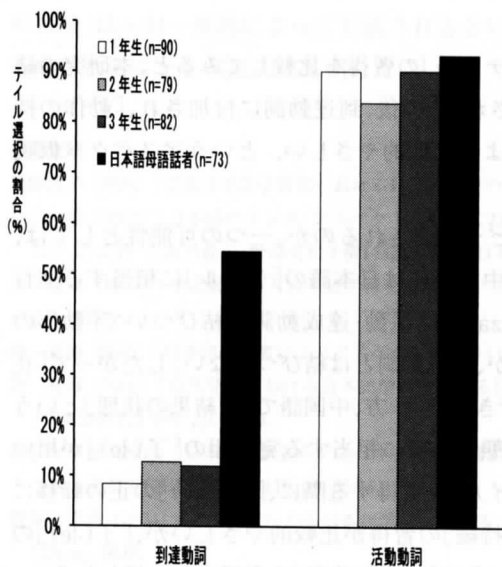


図1 中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者のテイル選択の割合

93.26%であった。そこで、グループごとに「テイル」の平均使用頻度に対し、一様性検定を行ったところ、学習者の1年生 [ $\chi^2(1)=473.622$ ,  $p<.001$ ]、2年生 [ $\chi^2(1)=295.291$ ,  $p<.001$ ]、3年生 [ $\chi^2(1)=424.976$ ,  $p<.001$ ] および日本語母語話者 [ $\chi^2(1)=455.059$ ,  $p<.001$ ] のいずれのグループも有意であり、チャンスレベルの50%よりは高かった。全体からみると、学習者の各グループも日本語母語話者も「テイル」の使用頻度が80%以上と高く、「タ」よりは「テイル」を選択する傾向がある(図1を参照)。

## 7. 考察

理論的には、到達動詞に付加される形態素「テイル」と「タ」はいずれも「結果の状態」という意味を表すことが可能である(Shirai & Kurono 1998; Sugaya & Shirai 2007)。しかし、分析の結果をみると、「結果の状態」を表す際に、学習者の3つのグループによる「テイル」の選択率は1年生が8.19%、2年生が12.66%、3年生が11.89%であって、いずれも有意にチャンスレベルの50%を下回り、「テイル」よりは「タ」が好まれていることが分かった。これに対し、日本語母語話者による「テイル」の選択率は54.4%であり、チャンスレベルの50%をやや上回り、「テイル」を使用する傾向が観察された。日本語母語話者と比べて、学習者は「結果の状態」を表現する時に、形態素「タ」を過剰使用する一方、「テイル」をほとんど使用しないことを意味する。一方、活動動詞

に付加される形態素「テイル」は「動作の持続」を表すことができるが、「タ」は「動作の持続」を表すことができない。「動作の持続」を表す際に、学習者の3つのグループによる「テイル」の選択率は1年生が90.14%、2年生が84.18%、3年生が90.24%であり、いずれも日本語母語話者の93.26%に近く、有意にチャンスレベルの50%を上回る。この結果は学習者も日本語母語話者と同じく「テイル」を用いて「動作の持続」という意味を表現することを示している。

到達動詞と活動動詞に付加される「テイル」の習得を比較してみると、本研究の結果は「テイル」が先に活動動詞に付加され、その後、到達動詞に付加され、「動作の持続」という意味の習得は「結果の状態」より比較的やさしい、というアスペクト仮説を支持することがいえる。

形態素「テイル」のプロトタイプはどう形成されるのか。一つの可能性としては、母語の転移によるものと考えられる。中国語には日本語の「テイル」に相当する進行形「在(zai-)」が存在する。しかし、「在(zai-)」は活動・達成動詞と結びついて「動作の持続」という意味を表すことができるが、到達動詞とは結びつかない。したがって「在(zai-)」は「結果の状態」を表すことはできない。一方、中国語では「結果の状態」という意味を表現する時に、常に日本語の形態素「タ」に相当する完了相の「了(-le)」が用いられる。つまり、中国語母語話者は「テイル」を習得する際に、「在(zai-)」の正の転移により、プロトタイプを形成し、「動作の持続」の習得が比較的やさしいが、「了(-le)」の負の転移に影響され、形態素「タ」をもいちて「結果の状態」を表現すると思われる。

もう一つの可能性として、一対一原理によるものが考えられる。前述したように、人間の学習メカニズムとして、学習者は常に一つの形に一つの意味を付与するとされている。日本語では「動作の持続」という意味を表す形態素は「テイル」だけはあるが、「結果の状態」という意味を表す形態素は「テイル」「タ」などある。したがって、「動作の持続」という意味は「テイル」という形と一対一の関係にあり、より付与されやすいが、「結果の状態」という意味は「テイル」という形とは一対一の関係にないため、付与されにくい(Sugaya & Shirai 2007)。しかし、この説が成り立つためには、学習者が「結果の状態」という意味を「テイル」と「タ」のどちらに付与するのかが分からなく、形態素「テイル」と「タ」の選択割合がチャンスレベルでなければならない。学習者による「タ」の選択割合が「テイル」より有意に高いという分析結果からは、一対一原理によって「テイル」のプロトタイプが形成されるとする説は支持されない。

## 8. 結論

本研究では中国語母語話者を対象に、日本語の形態素「テイル」の習得について調べた。習得過程としてはアスペクト仮説と一致し、「テイル」は先に「+動作性」「-限界性」「-瞬間性」をもつ活動動詞に付加され、「動作の持続」という意味が先に習得されることが分かった。さらに、「テイル」のプロトタイプ的な意味とされている「動作の持続」は一對一原理によって形成されるというよりは、むしろ母語の転移によって形成されることを実証的に証明した。

### 参考文献

- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における『-テイル』の習得について」『日本語教育』87, pp. 153-164.
- 小山 悟 (2003) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個性性-母語の役割と影響を中心に-」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育:日本語を対象として』くろしお出版, pp. 415-436.
- 許 夏珮 (1997) 「中上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95, pp. 37-48.
- 許 夏珮 (2005) 「日本語学習者によるアスペクトの習得」くろしお出版.
- 許 夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習者による『テイル』の習得研究:OPIデータの分析結果から」『日本語教育』104, pp. 20-29.
- 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究:『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『日本語教育』119, pp. 65-74.
- 菅谷奈津恵 (2004) 「文法判断による日本語学習者のアスペクト習得研究:L1の役割の検討」『日本語教育』123, pp. 56-65.
- Andersen, R. W. (1991) Developmental sequence: The emergence of aspect marking in second language acquisition. In T. Huebner and C. A. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in Second Language Acquisition and Linguistic Theories*
- Andersen, R. & Shirai, Y. (1996) Primacy of aspect in first and second language acquisition: The pidgin/creole connection. In: W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.) *Handbook of second language acquisition* San Diego, CA: Academic.
- Li, P. & Shirai, Y. (2000) *The acquisition of lexical and grammatical aspect*. Berlin Mouton de Gruyter.
- Shirai, Y. & Andersen, R. (1995) The Acquisition of Tense-Aspect Morphology: a Prototype Account. *Language* 71, pp. 743-762.
- Shirai, Y. (1998) Where the progress and the resultative meet: Imperfective aspect in Japanese, Korean, Chinese and English. *Studies in Language*, 22, pp. 661-692.
- Shirai, Y. & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48, pp. 245-279.
- Shirai, Y. (2000) The semantics of the Japanese imperfective -te-i-ru: An integrative approach. *Journal of Pragmatics*, 32, pp. 327-361.
- Shirai, Y. (2002) The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese*

- as a *Second Language* 5, pp. 42-61.
- Shirai, Y. & Nishi, Y. (2005) How what we mean impacts how we talk: The Japanese imperfective aspect marker -te i-ru in conversation. In J. Frodesen & C. Holten (Eds.), *The power of context in language learning and teaching*. Boston: Thomson Heinle.
- Sugaya, N., & Shirai, Y. (2007) The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 learner of Japanese. *Studies in Second Language acquisition*, 29, pp. 1-38.
- Vendler, Z. (1967) Verbs and times. In Z. Vendler (Ed.), *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.